

ヴェネツィアのサン・モイゼ劇場とデビュー作《結婚手形》

モンベッリー座との交際は、ロッシーニにオペラ作曲家への夢を駆り立てずにはいなかった。8月には人気歌手ローザ・モランディ (Rosa Morandi, 1782-1824. ソプラノ 図 27) が夫の作曲家ジョヴァンニ・モランディ (Giovanni Morandi, 1777-1856) と共にボローニャに逗留した。ローザはヴェネツィアのサン・モイゼ劇場 (Teatro di San Moisè) 秋のシーズンにプリマ・ブッフア・アツルータ (prima buffa assoluta [唯一無二の筆頭滑稽女性歌手]) を務める契約を結び、ヴェネツィアに赴く途上ボローニャに立ち寄ったのである。ロッシーニの両親と旧知のモランディ夫妻は、このときジョアキーノの音楽的成長にふれる機会もあったようだ (伝記作者ラディチョッティは、ロッシーニの母アンナがモランディに会いに行き息子の成長ぶりを話し、オペラを作曲する機会を与えてほしいと頼んだとする) 2。



図 27 ローザ・モランディ

当時ヴェネツィアには四つのオペラハウス——フェニーチェ劇場 (Teatro La Fenice)、サン・ベネデット劇場 (Teatro di San Benedetto)、サン・ジョヴァンニ・グリゾストモ劇場 (Teatro Grimani di San Giovanni Grisostomo)、サン・モイゼ劇場があった (18世紀末には八つ存在したが、1806年6月に四つに減らされた3)。サン・モイゼ劇場は、1640年にモンテヴェルディ作曲《アリアンナ (Arianna)》で開場した四層 107 の桟敷と 164 席の平土間からなる小さなオペラハウスで (図 28)、所有者が興行師に劇場をシーズン単位で貸与し、18世紀末から19世紀の初頭にかけてはしばしばファルサ (farsa) もしくはファルセッタ (farsetta) 4 と呼ばれる小規模な歌劇を二本立てで興行した。オーケストラは興行師の委託を受けた音楽家が楽士を募って随時編成した。

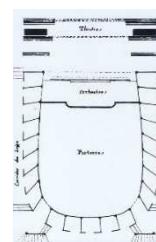


図 28 サン・モイゼ劇場の内部

このサン・モイゼ劇場では 1793 年秋から 1813 年夏までの 20 年間に 99 の新作 1 幕オペラが初演されたが、ロッシーニがデビューした 1810 年にはファルサの流行が終わり、かろうじてこの劇場だけが 1 幕物の委嘱を続けていた (1818 年開場) 5。後にロッシーニは、「(サン・モイゼ劇場では) 合唱を使わず舞台転換も無い、4 人か 5 人の登場人物による短い喜歌劇を上演し、歌手たちはとても短期間に音楽を覚えることができ、興行師にとっても経費節減になった」と語り、新人作曲家の登竜門として果たした役割高く評価した6。

当時ナポレオンを王とするイタリア王国 (1805~14 年) に帰属したヴェネツィアではフランス人の劇団による演劇興行も盛んに行われ、サン・モイゼ劇場では 1807 年秋~08 年春、1809 年春のシーズンにフランス人の劇団がモリエール、コルネイユ、ヴォルテール、ボーマルシェなどの芝居を多数上演した。ロッシーニ時代のイタリア・オペラの原作にフランス演劇が多いのも占領時代に数多くの台本が流布したことと関係し、後述する《絹のはしご》《なりゆき泥棒》《ブルスキーノ氏》も同時代のフランス喜劇台本が原作となっている。

サン・モイゼ劇場の 1810 年秋のシーズンは 9 月 15 日に幕を開けたが、10 月になると予定された 5 作の新作ファルサのうち五つ目の作曲が間に合わないことが明らかになった。頭を抱える興行師アントーニオ・チェーラ (Antonio Cera, ?-?) にローザ・モランディが推薦したのが、ボローニャで再会した青年ロッシーニだった7。チェーラの依頼を受けたロッシーニは直ちにヴェネツィアに赴き (10 月半ば過ぎと推測)、ガエターノ・ロッシ (Gaetano Rossi, 1774- 1855) 台本による 1 幕のファルサ・コーミカ《結婚手形 (La cambiale di matrimonio)》を短期間に——ラディチョッティよれば「数日間」で——作曲した。原作はカミッロ・フェデリーチ (Camillo Federici, 1749-1802) 8 による 5 幕の喜劇『結婚手形 (La cambiale di matrimonio)』(1791 年執筆、1793 年トリノ刊) 9 である。

■あらすじ

全 1 幕 商人トビーア・ミルの家。カナダの取引先ズルックから手紙で花嫁の調達を依頼されたミルは、自分の娘ファンニを娶らせて借金を帳消しにしようと目論む。父に内緒で青年エドアルド・ミルフォールを愛するファンニは、カナダから到着したズルックの求婚を拒絶する。やがてファンニに恋人がいると悟ったズルックは、彼らの結婚を成就させるべく手形に裏書きして与え、ミルに結婚の取消しを通告する。激怒したミルはズルックに決闘を申し入れるが、エドアルドからズルックの裏書きした手形の支払いを求められ、しぶしぶファンニとエドアルドの結婚を認める。

稽古では次のトラブルが生じたと伝えられるが、これはドイツ音楽に親しむロッシーニが管弦楽のパートを重視したことが原因と思われる——「最初の稽古で何人かの役者たちは、作曲者が自分たちのパートの幾つかを変更し、なおかつ自分たちの声を圧倒するやかましい管弦楽伴奏をもっと薄くしなければ歌わないと主張した。ロッシーニは家に帰り (モランディ夫妻は彼を寄宿させていた)、自分の部屋に閉じ籠もるとわっと泣き出した。すぐに劇場のマエ

ストロが彼を励ましに来て、劇場の慣習や歌手たちの自惚れが求める楽譜の変更の手助けをしてやった。少年はモランディの経験と知識に助けられ、ファルサは無事演奏されることになったのだ。」¹⁰

1810年11月3日に行われた初演は、ジュゼッペ・ファリネリ（Giuseppe Farinelli, 1769-1836）作曲のファルサ《結論を急ぐなかれ、または真の感謝（*Non precipitare i giudizi, ossia La vera gratitudine*）》との二本立てで行われた（図29）。《結婚手形》の評判はまずまずで、初演翌日の地元紙は公演が「順調（felice）」に運び、モランディの歌うアリアが好評だったと報じている（『クオティディアーノ・ヴェネト（*Quotidiano Veneto*）』1810年11月4日付）¹¹。後年ロッシーニは、このオペラを200フランの報酬で契約したが、「当時の自分には少なからぬ金額に思えた」と語っている（ヒラーによる聞き書き）¹²。初演配役は次のとおり。



図29 《結婚手形》初版台本

役名と声種	歌手
トビーア・ミル Tobia Mill(バス)	ルイーダ・ラッファネリ(Luigi Raffanelli, 1752-1821)
ファンニ Fanny[初版台本記載は Fanni](ソプラノ)	ローザ・モランディ(Rosa Morandi, 1782-1824)
エドアルド・ミルフォール Edoardo Milfort(テノール)	トンマーゾ・リッチ(Tommaso Ricci, ?-?)
ズルック Slook(バス)	ニコラ・デ・グレチス(Nicola de Grecis, 1773-1826)
ノルトン Norton(バス)	ドメニコ・レモリーニ(Domenico Remolini, ?-?)
クラリーナ Clarina(メゾソプラノ)	クレメンティーナ・ラナーリ(Clementina Lanari, ?-?)

デビュー作《結婚手形》は若々しい青春の息吹を感じさせる反面、若書きの未熟さも否定できない。序曲（シンフォニア）はポローニャ音楽学校時代に試験課題として作曲した《シンフォニア、変ホ長調》（1809年）の転用で、冒頭の総奏はモーツァルト《魔笛》を意識した可能性がある（後年ロッシーニは、学生時代に《魔笛》の序曲を知って同じような曲を作ろうとしたがうまくいかなかった、と述べている）¹³。

九つのナンバー（もしくは11のナンバー）は、勢いのある導入曲〈口うるさい老人がいらないから（*Non c'è il vecchio sussurrone*）（N.1）と三重唱〈あの愛くるしい顔（*Quell'amabile visino*）（N.4 [または N.5] の後半部）の掛け合いが秀逸で、ズルックのカヴァティーナ〈ありがとう…ありがとう…いとしき友よ！（*Grazie... grazie... caro amico!*）（N.3）に後年ロッシーニがバツォ・ブッフオに好んで与えた楽想が顔を覗かせる。ファンニのアリア〈この喜びを貴方に伝えたいのです（*Vorrei spiegarvi il giubilo*）（N.7 [または N.8]）のアレグロ部には《セビーリャの理髪師》ロジーナとフィガロの二重唱の楽句も先駆的に使われるが¹⁴、全体に個性の発現に乏しく、天才的な着想やエネルギーの横溢は感じられない。それゆえ《結婚手形》はロッシーニが才能を十全に開花させたオペラではなく、多くの初期作品と同様、若き作曲家の出発点としてののみ好意的に捉えるべきである（管弦楽の用法もチャムローザやマイルのそれと同質）。

1810年11月3日にサン・モイゼ劇場で行われた初演は一定の評価を得た。最初の再演は翌1811年6月パドヴァで行われたが¹⁵、イタリアでの上演は1815年1月のロマーノが最後となる。国外では1816年4月26日にバルセロナ、1834年10月2日にヴィーン（ケルトナートア劇場。《カナダの花婿（*Der Brautigam von Canada*）》と改題した独語訳）で上演され、その後1837年ヴィーンでの伊語上演を最後に演目から消え、復活上演は1910年4月23日ヴェネツィアのフェニーチェ劇場にて初演100周年を記念して行われた（図30）¹⁶。



図30 《結婚手形》リコルディ版(1910年)

台本が原因で上演を打ち切られた《ひどい誤解》

《結婚手形》の初演を終えたロッシーニはポローニャに戻り、1811年初頭、再び同地の音楽アカデミーでマエストロ・アル・チェンバロの職を得た。5月10日にはハイドンのオラトリオ《四季》（イタリア語版）¹⁷の合唱とソリストの指揮者を務めた（図31）。これはフランス皇帝ナポレオンの息子（ナポレオン・フランソワ・シャルル・ジョゼフ・ボナパルト Napoléon François Charles Joseph Bonaparte, 1811-32）が3月20日パリで誕生してローマ王の称号を付与されたことを祝う公演で、ロッシーニの父ジュゼッペがトランペット奏者を務め、独唱者の一人エリザベッタ・マンフレディーニは後に《バビロニアのチーロ》の初演歌手となる（後述）。



図31 ハイドン《四季》の出演者リスト

続いてロッシーニは、ポローニャのコルソ劇場の秋シーズンにマエストロ・アル・チェンバロ兼合唱指揮者（maestro al cembalo e direttore dei cori）のポストを得た。このとき同劇場は二つのオペラ・ブッフアの上演を予定し

たが、ステューファノ・パヴェージ作曲《マルカントーニオ殿 (Ser Marcantonio)》の再演が告知されただけで、もう1作は未定だった。このことから劇場側は当初ロッシーニに新作を委嘱するつもりがなく、9月21日のシーズン開幕後に歌手たちの推薦で作曲依頼があったと推測されている¹⁸。

台本作者ガエターノ・ガズバリ (Gaetano Gasbarri, 1770-1844)¹⁹は1793年からナポリで喜歌劇の台本を手がけ、1808年以降はボローニャの劇場にも台本を供給していた。この秋のシーズンには男装役で人気を博すコントラルト、マリーア・マルコリーニ (Maria Marcolini, 1780頃-? [1820以降]) をプリマ・ドンナとする歌手団が生まれ、ガズバリは彼女の魅力を最大限に引き出すべく2幕のドラマ・ジョコーゾ・ペル・ムジカ《ひどい誤解 (L'equivoco stravagante)》の台本を書いた (図32)。これに先立ち、同年9月23日コルソ劇場で《マルカントーニオ殿》を観劇したスタンダールは、当日の日記に感想を記している——「プリマ・ドンナのマリエッタ・マルコリーニ夫人は完璧な優美さを具えている。さらに力強さがあれば良いのだが。だが、この優美さは驚くべきもので、私たちがフランスにおいて持つべきものである」²⁰。



図32 マリーア・マルコリーニ

■あらすじ

第1幕 成り上りの富農ガンベロットの娘エルネスティーナに一目惚れした貧乏青年エルマンノは、友人の召使フロンティエーノの手引きで彼女の家庭教師となる。愚かな婚約者ブラリッキオに我慢ならないエルネスティーナは青年の求愛に心動かされるが、彼女の真意を誤解したエルマンノが自殺しようとして大騒ぎになる。

第2幕 フロンティエーノは友人の恋を成就させるため、「エルネスティーナは去勢された男子。軍隊を脱走し、娘として生活している」とブラリッキオに信じさせる。ブラリッキオの密告でエルネスティーナは憲兵に逮捕されるが、エルマンノの助けで脱獄に成功する。すべての誤解は嘘が発端と判明し、二人は無事結ばれる。

《ひどい誤解》の楽曲は序曲 (シンフォニア) と19のナンバーから成るが²¹、自筆楽譜を消失したため序曲については「作曲しなかった」「不詳の旧作を転用」「バリエに現存する筆写楽譜の序曲がそれ」など諸説ある。ロッシーニがコルソ劇場と交わした契約や作曲経過を詳らかにする史料も現存せず、明らかなのは《ひどい誤解》が1811年10月26日に初演され、聴衆の評判も良かったとの事実のみである。10月29日付『レダットーレ・デル・レーノ (Redattore del Reno)』(1811年N.43)の批評は、第1幕の導入曲、四重唱、二重唱、フィナーレ、第2幕の五重唱、二重唱、マルコリーニの歌うエルネスティーナ役のアリアが称賛され、作曲者がカーテンコールに呼び出され、第2幕の五重唱とマルコリーニのアリアがアンコールされたと記している²²。初演配役は次のとおり。

役名と声種	歌手
エルネスティーナ Ernestina (コントラルト)	マリーア・マルコリーニ (Maria Marcolini, 1780頃-?)
ガンベロット Gamberotto (バス)	ドメニコ・ヴァッカーニ (Domenico Vaccani, ?-?)
ブラリッキオ Buralicchio (バス)	パオロ・ロジク (Paolo Rosich, 1780頃-?)
エルマンノ Ermanno (テノール)	トンマーゾ・ベルティ (Tommaso Berti, ?-?)
ロザリーア Rosalia (ソプラノ)	アンジョラ・キエス (Angiola Chies, ?-?)
フロンティエーノ Frontino (テノール)	ジュセツペ・スピエリト (Giuseppe Spirito, ?-?)

ロッシーニの早熟な才能は、ガンベロットとブラリッキオの小二重唱〈ああ、お出でなさい、私の懐へ (Ah, vieni al mio seno)〉(N.3)での言葉の繰り返しや同音反復、四重唱〈同時に紹介しよう (Ti presento a un tempo istesso)〉(N.6)のアンサンブルの随所に聴き取れる。尊大な歌い出しのガンベロットのアリア〈話してください、弁舌さわやかに (Parla, favella, e poi)〉(N.7)も秀逸で、その素材は後に《絹のはしご》の二重唱に再使用される。第1幕フィナーレ〈愛らしい瞳を思い (Volgi le amabili pupille elastiche)〉(N.10)は三つの部分からなり、中間部エルネスティーナ、ガンベロット、ブラリッキオの三重唱は後に《絹のはしご》と《試金石》に改作使用される。第2幕のアンサンブルでは五重唱〈甘き希望よ、ああ、降りてきてください (Speme soave ah scenda)〉(N.15)が優れ、早口言葉を交えたストレッタも痛快である (後に《試金石》第2幕の五重唱に転用改作)。これに対し、エルネスティーナの合唱付きロンド〈もしもお前に幸せが戻ったら (Se per te lieta ritorno)〉(N.18)はヒロインの大アリアとしては貧弱である。旧作からの改作転用に《結婚手形》ズルックのカヴァティエーナの素材を用いたブラリッキオのカヴァティエーナ〈愛嬌のある私の目に (Occhietti miei vezzosi)〉(N.2)があり、後のオペラに再使用される素材も多いことから、《ひどい誤解》は若々しい楽想や優れた音楽的着想の原点と位置づけられる (図33)。

だが初演の際に、性的な隠喩や、きわどい言葉を含む台本が問題にされてしまった。とりわけ「娘として育てられたが、実はカストラートにするため去勢された息子」「軍隊を脱走して匿われている」といった台詞や人物設定が

公序良俗に反すると警察当局に批判され、上演は最初の 3 回で打ち切られた。その結果ドメニコ・ブッチーニ (Domenico Puccini, 1772-1815 ジャコモ・ブッチーニの祖父) 作曲《クイント・ファビオの勝利 (*Il trionfo di Quinto Fabio*)》に差し替えられ、ロッシーニはその稽古で自分の指示に従わない合唱団員に棒で殴りかかり、警察に拘留される事件を起こしている (11月8日)。これはクイント・ファビオ役のマルコリーニのためにロッシーニが合唱とカヴァティーナ²³を作曲し、その挿入に合唱団が反発したのが原因であった。10日後にはシモーネ・マイル作曲《スコットランドのジネーヴラ (*Ginevra di Scozia*)》の稽古にロッシーニが現れず、問題になっている (11月18日)²⁴。

前記のように《ひどい誤解》は3回で上演を打ち切れ、1825年トリエステで第三者の改作により唯一の再演をみたものの、その後は1965年9月7日にシエナのキジアーナ音楽アカデミーが復活上演するまで140年間目の目をみながった²⁵。



図 32 《ひどい誤解》ロザリーナのアリア(ミラーノ、リコルディ社、1824年。筆者所蔵)

- 1 Teatro di San Moisè は一般名称。初版台本は Teatro Giustiniani in San Mosè と記載。
- 2 Radiciotti, *Gioacchino Rossini, vol. I*, pp.56-57. 作曲依頼の手紙や契約書は現存しない。ローザ・モランディについては水谷彰良『プリマ・ドンナの歴史 II』(東京書籍、1998年) pp.148-159.を参照されたい。
- 3 Michele Girardi, *Rossini a Venezia: le farse per il Teatro Giustiniani di San Moisè* (フェニーチェ劇場 2012-13 年上演プログラム所収) ,p.13.
- 4 フランス演劇のファルス (farce [中世喜劇の一ジャンル]) に起因する用語で、オペラの呼称としては 18 世紀半ばから小規模な喜歌劇を指して使われた。
- 5 ロッシーニ時代のサン・モイゼ劇場の上演記録は、Maria Giovanna Miggiani, *Il teatro di San Moisè (1793-1818)* [in *Bollettino del Centro rossiniano di studi*, Anno XXX., Pesaro, Fondazione G. Rossini, 1990. 参照。同劇場の上演システムに関する分析は、水谷彰良『サン・モイゼ劇場のレパートリー変遷と上演システムに関する試論』(『ロッシニアナーナ』第 26 号 pp.1-21. 改訂版は日本ロッシーニ協会ホームページに掲載。http://societarossiniana.jp/sanmoise.pdf) を参照されたい。
- 6 Ferdinand Hiller, *Plaudereien mit Rossini*, 16., 1855., in *Bollettino del Centro rossiniano di studi*, Anno XXXII, Pesaro, Fondazione Rossini, 1992., p.105.
- 7 多くの文献が《結婚手形》を委嘱した興行師をカヴァッリ侯爵 (フランチェスコ・カヴァッリ Francesco Cavalli, 1765 頃-1830 頃) とし、同侯爵が 1806 年頃に少年ロッシーニを知るに至った経緯をロッシーニの証言に基づいて紹介している。けれどもカヴァッリがサン・モイゼ劇場の興行師を務めたのは 1806 年秋季~1807 年謝肉祭のみで、1808 年秋から 1813 年までサン・モイゼ劇場の興行権を得たのはアントーニオ・チェーラである。チェーラがサン・モイゼ劇場で単独に興行権を得たのは 1810 年秋季からで、同年 3 月 15 日に結ばれた契約では 1810 年秋季と続く謝肉祭シーズンをセットで貸与され、「八つの新作ファルサと、これとは別に良い結果の得られた複数のファルサとオペラを劇場の求めに応じて上演する」とされている。
- 8 カミッロ・フェデリーチは筆名。本名: ジョヴァンニ・バッティスタ・ヴィアッソロ Giovanni [または ジョヴァン Giovan] Battista Viassolo
- 9 フェデリーチ原作とロッシン台本の間にジュゼッペ・ケッケリーニ (Giuseppe Checcherini, 1777-1840) によるオペラ台本《為替手形による結婚 (*Il matrimonio per lettera di cambio*)》(カルロ・コッチャ [Carlo Coccia, 1782-1873] のデビュー作。2 幕のブルレッタ) があり、1807 年 11 月 14 日にローマのヴァッレ劇場で初演されている。しかし、ロッシンがケッケリーニ台本を下敷きにした可能性は少ないと思われる (Francesco Cacaci, *La cambiale di matrimonio da Federici a Rossi*, in *Bollettino del Centro rossiniano di studi*, Pesaro, Fondazione Rossini, 1975., n.1-2., pp.22-64. 参照)。
- 10 Radiciotti, op.cit., p.57.
- 11 Giorgio Appolonia, *Le voci di Rossini*, Torino, Eda, 1992., p.38.
- 12 Hiller, op.cit., p.105.
- 13 ヒラーへの述懐。Hiller, op.cit., p.129.
- 14 そのパッセージはセバスティアアーノ・ナゾリーニ (Sebastiano Nasolini, 1768c-99) 作曲《セミラーミデの死 (*La morte di Semiramide*)》(1790 年) 第 1 幕セミラーミデのアリア (Serbo ancora un'alma altera) からの借用である可能性が高い。
- 15 1811 年春のトリエステのグランド劇場を挙げる文献もあるが、同劇場の上演記録で確認できず除外した。
- 16 詳細解説と上演歴は日本ロッシーニ協会ホームページ掲載の拙稿「《結婚手形》作品解説」を参照されたい。http://societarossiniana.jp/Cambiale.2014.8.pdf
- 17 《天地創造》とする文献は誤り。アッカデーミア・デイ・コンコルディアは 1808 年 4 月 6 日と 10 日に《天地創造》を演奏したが、ロッシーニは関与しない。
- 18 Philip Gossett, *Rossini's Equivocal, Extravagant Literary Lady*. in programma del ROF "L'equivoco stravagante", 2002., p.13.
- 19 ガズパッリの生涯は、Marco Beghelli, *Vita di Gaetano Gasparri, librettista*. (in *Bollettino del Centro rossiniano di studi*, Anno XLIX., Pesaro, Fondazione Rossini, 2009., pp.5-39.) 参照。
- 20 Stendhal. *Œuvres intimes I*, Gallimard, 1981., pp.771-772. マルコリーニの生涯と出演歴については、水谷彰良『プリマ・ドンナの歴史 II』(東京書籍, 1998) pp.159-168. 及び最新研究の Federico Gon, *Maria Marcolini cantante dell'epoca rossiniana*. (in *Bollettino del Centro rossiniano di studi*, Anno XLVII., Pesaro, Fondazione Rossini, 2007., pp.55-81.) を参照されたい (出演歴は後者が詳しい)。
- 21 以下、楽曲ナンバーは 2002 年と 2008 年の ROF 上演プログラムに準拠。
- 22 批評の一部は *Rossini 1792-1992 Mostra storico-documentaria*, op.cit., p.85. 及び Appolonia, op.cit., p.74. 参照。
- 23 《万歳ローマ、クイント万歳 (*Viva Roma e Quinto viva*)》と《愛しき祖国、無敗のローマ (*Cara Patria, invitta Roma*)》
- 24 稽古中に起こした騒動に関するドキュメントは、*Lettere e documenti I*, op.cit., pp.20-26. [書簡 12-17] 参照。

²⁵ 復活上演のエディションはオペラ作曲家ヴィート・フラッツィ (Vito Frazzi, 1888-1975) が作成したが、2 幕から 3 幕への改変、種々のカットと楽曲の入れ替え、声種変更や移調などオリジナルをひどく歪めている。詳細解説と上演歴は日本ロッシニ協会ホームページ掲載の拙稿「《ひどい誤解》作品解説」を参照されたい。 <http://societarossiniana.jp/equivoco.pdf>